

岩手町の夫婦老人生活実態調査

齊 藤 修・安 藤 貞 雄

はじめに

国勢調査によると岩手県の65歳以上の高齢者世帯（老人世帯）は第1表のとおりである。岩手町の老人夫婦世帯は昭和50年81世帯、昭和55年127世帯、昭和60年4月1日現在、岩手町社会福祉協議会の資料によると118世帯で昭和50年と比較すると37%も増加している。今回の調査対象の老人夫婦は両者ともに60歳以上の老人

夫婦に限定し、回答は妻とした。調査地として集計解析する岩手町は昭和52年6・7月に独居老人調査を実施し、追跡を昭和59年7月に実施している町である。

調査方法はホームヘルパーとともに対象世帯を訪問し、質問紙による面接調査で実施した。

調査期は昭和60年7月下旬である。調査対象は60～64歳22人、65～74歳11人、75歳以上3人

表1 65歳以上の高齢者世帯（老人世帯）の構造（昭50、55）

単位：世帯，%

年 度	県・市 郡部・岩手町	普通世帯 総 数	高齢者 世帯率	老人核家族世帯率					老人単 独世帯	老人・その 他の世帯
				計	夫妻のみ	夫 子	婦 と 供	片 親 と 供		
昭和50年	岩手県	351,798	26.3	15.3	7.6	4.5	3.3	4.6	80.0	
	市 部	209,966	22.4	19.4	9.7	5.5	4.2	5.8	74.8	
	郡 部	141,832	32.0	11.3	5.4	3.4	2.4	3.4	85.3	
	岩手町	4,716	27.9	13.4	6.5	5.2	1.7	3.6	82.9	
昭和55年	岩手県	380,807	28.6	18.6	9.8	5.0	3.8	5.8	75.6	
	市 部	228,220	24.6	22.6	12.2	5.8	4.6	7.3	70.1	
	郡 部	152,587	34.5	14.2	7.1	4.0	3.0	4.2	81.6	
	岩手町	4,902	31.1	15.5	8.3	4.1	3.1	4.7	79.8	

注) 総理府「国勢調査報告」昭和50年、昭和55年

表2 健康状態

健康状態	才 性	60 ~ 64		65 ~ 74		75 ~		計		総 計
		妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	
非 常 に 健 康			4 (18.2)		3 (27.3)				7 (19.4)	7 (9.7)
普 通		8 (36.4)	8 (36.4)	2 (18.2)	2 (18.2)		1 (33.3)	10 (27.8)	11 (30.6)	21 (29.2)
病気がちだが生活に支障なし		2 (9.1)	1 (4.5)					2 (5.6)	1 (2.8)	3 (4.2)
医者にかかっている		12 (54.5)	9 (40.9)	9 (81.8)	6 (54.5)	3 (100)	2 (66.7)	24 (66.6)	17 (47.2)	41 (56.9)
病気だが医者にかかっていない										
ね た き り										
計		22 (100)	22 (100)	11 (100)	11 (100)	3 (100)	3 (100)	36 (100)	36 (100)	72 (100)

年齢別 $X^2=6.478$

n s D F = 6

夫妻別 $X^2=8.576$

n s D F = 3

の合計36人である。

1. 身体状況

健康状態；現在の健康状態について質問した項目が表2である。「医者にかかっている」人が60～65才において、妻で約55%，夫で40.9%，65歳以上では妻80%以上，夫でも50%をこえて

いる。全体でも「病気がちだが生活に支障なし」を加えると、妻では70%強，夫でも50%と高い割合を占める。この地区でも、高齢化に伴って「病気」が人々の生活に大きな影をおとしていることを無視できない。

しかし、「病気がちだが医者にかかっていない」という人がゼロということは、医者に行くこと

表3-1 現在の病気

有無	性	60 ~ 64		65 ~ 74		75 ~		計		総計
		妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	
有		14 (63.6)	12 (54.5)	1 (81.8)	7 (63.6)	3 (100)	2 (66.7)	26 (72.2)	21 (58.3)	47 (65.3)
無		8 (36.4)	10 (45.5)	2 (18.2)	4 (36.4)		1 (33.3)	10 (27.8)	15 (41.7)	25 (34.7)
計		22 (100)	22 (100)	11 (100)	11 (100)	3 (100)	3 (100)	36 (100)	36 (100)	72 (100)

年齢別 $X^2 = 2,145$ n s D F = 2 夫妻別 $X^2 = 1,532$ n s D F = 1

表3-2 妻、夫の病気の有無

妻	夫	60 ~ 64		65 ~ 74		75 ~		計		総計
		有	無	有	無	有	無	有	無	
有		8 (36.4)	4 (18.2)	7 (63.6)		2 (66.7)		17 (47.2)	4 (11.1)	21 (58.3)
無		7 (31.8)	3 (13.6)	1 (9.1)	3 (27.3)	1 (33.3)	9	9 (25.0)	6 (16.7)	15 (41.7)
計		15	7	8	3	3		26 (72.2)	10 (27.8)	36 (100)

年齢別 $X^2 = 7,244$ n s D F = 4 有無別 $X^2 = 1,915$ n s D F = 1

表3-3 病名

病名	性	60 ~ 64		65 ~ 74		75 ~		計		総計
		妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	
神経痛		1 (7.1)	2 (16.7)	2 (22.2)		3 (100)		6 (23.1)	2 (9.5)	8 (17.0)
高血圧病		5 (35.7)	5 (41.7)	2 (22.2)	3 (42.8)		1 (50)	7 (26.9)	9 (42.9)	16 (34.0)
胃腸病					1 (14.3)				1 (4.8)	1 (2.1)
心臓病		2 (14.3)	1 (8.3)					2 (7.7)	1 (4.8)	3 (6.4)
糖尿病		1 (7.1)		3 (33.4)	2 (28.6)			4 (15.4)	2 (9.5)	6 (12.8)
呼吸器系の病気										
脳卒中					1 (14.3)				1 (4.8)	1 (2.5)
その他		5 (35.7)	4 (33.3)	2 (22.2)			1 (50)	7 (26.9)	5 (23.8)	12 (25.5)
計		14 (100)	12 (100)	9 (100)	7 (100)	3 (100)	2 (100)	26 (100)	21 (100)	47 (100)

年齢別 $X^2 = 21,356$ n s D F = 12 夫妻別 $X^2 = 5,109$ n s D F = 6

に抵抗がなく身近な存在であることを示している。その反面、現在大きな社会問題になっている老人医療費の増加をもたらしている大きな要因でもある。しかし、今後、老人医療費の有料化と相まってどのように変化してゆくかが今後の大きな社会問題になってくるといえる。 χ^2 検定5%水準では、年齢別で有意差はみられないが、夫妻では有意差がみられた。妻の方が夫と比較して病気がちである傾向が強い。

現在の病気；夫婦の現在の「病気の有無」をみたのが表3-1である。

全体で妻、夫とも約60%以上の方が、現在なんらかの病気を持っている。とくに、妻の場合は表2の「健康状態」と同様に72%と高い数値である。また、年齢を重ねるにしたがってその割合が高くなってくる。 χ^2 検定では有意差はみられない。

表3-2は、表3-1の妻と夫の「病気の有無」をクロス集計したものである。この表をみると妻、夫の両者とも「病気を有している」ケースが全体で50%弱を占めている。とくに65歳以上になると6割と高い割合を占める。一方、妻、夫とも「病気を有していない」ケースは、全体で16%と低い結果になっている。すなわち、8割以上の夫婦老人世帯において、妻、夫ともあるいはどちらか一方が、現在何らかの病気を持っていることになる。 χ^2 検定で有意差はみられなかった。

病名；表3-3では、現在病気を有している人に対してその「病名」について質問した項目である。全体で「高血圧症」がもっとも高く34%を占めている。とくに夫の場合は約43%と半数近い人が「高血圧症」を患っている。ついで「神経痛」17%、「糖尿病」12%となっている。夫と比較した場合、妻では「高血圧症」と「神経痛」がほぼ同じ割合を占めている。また「糖尿病」についてみると妻の方が夫よりも高い割合を占める。 χ^2 検定で、年齢別では有意差はみられなかったが、妻と夫の間では有意差が認められた。

健康維持の心懸け；表3-4では、日常生活において「健康維持のためにどのようなことに心懸けているか」について質問した項目である。全体で50%の人が「食事に気をつけている」と回答しており、食事に対する保健活動の効果がうかがえる。健康維持のために何らかの形で配慮している人が全体で8割と大きい割合を占めていることは、健康に対する関心の高さがうかがえる。反面、「特にしていない」と回答した人が60~64歳では22.7%と高く、65~74歳では9.1%1人と年齢によってその関心に差があることも認められるが、 χ^2 検定では、有意差はみられなかった。

表3-5は、表3-1「現在の妻の病気の有無」と表3-4とをクロス集計したものである。健康維持のために「特に何もしていない」と回

表3-4 健康維持のために

項目	60 ~ 64	65 ~ 74	75 ~	計
食事に気をつける	11 (50.0)	6 (54.5)	1 (33.3)	18 (50.0)
規則正しい生活	3 (13.7)		1 (33.3)	4 (11.1)
散歩, ラジオ体操	2 (9.1)	1 (9.1)		3 (8.3)
スポーツ				
定期的健康診断		1 (9.1)		1 (2.8)
保健薬, 強壮剤の服用	1 (4.5)			1 (2.8)
その他		2 (18.2)		2 (5.6)
特にしていない	5 (22.7)	1 (9.1)	1 (33.3)	7 (19.4)
計	22 (100)	11 (100)	3 (100)	36 (100)

年齢別 $\chi^2=11,647$ ns DF = 12

表3-5

病 気 有	病 気 無
14 (53.8)	4 (40)
2 (7.7)	2 (20)
3 (11.5)	
1 (3.8)	
1 (3.8)	
2 (7.7)	
2 (7.7)	4 (40)
26 (100)	10 (100)

病気有無別 $\chi^2=8,269$ ns DF = 6

答している人は、「病気を有している人」では、わずか2人(7.7%)にすぎない。一方「病気の無い人」の4人(40%)と比較した場合、「病気を有している人」の日常生活における健康に対する配慮がうかがえる。さらに「病気を有している人」が、健康維持の方法として散歩、定期的健康診断など幅広いことがうかがえる。 χ^2 検定で有意差はみられない。

2. 家族関係

子供の有無;表4-1は「子供の有無」について質問した項目である。36世帯中34世帯約95%の夫婦に子供がおり、1世帯の平均子供数

表4-1 子供の有無

有無	才	60~64	65~74	75~	計
有		21 (95.5)	10 (90.9)	3 (100)	34 (94.4)
無		1 (4.5)	1 (9.1)		2 (5.6)
計		22 (100)	11 (100)	3 (100)	36 (100)

年齢別 $X^2 = 4,813$ ns DF = 2

表4-2 子供の居住地

地域	才	60~64	65~74	75~	計
同 町 内		6 (28.6)	4 (40)	1 (33.3)	11 (32.4)
県内の他市町村		11 (52.4)	2 (20)	1 (33.3)	14 (41.2)
県 外		4 (19.9)	4 (40)	1 (33.3)	9 (26.8)
計		21 (100)	10 (100)	3 (100)	34 (100)

年齢別 $X^2 = 3,231$ ns DF = 4

表4-3 子供と会う頻度

	才	60~64	65~74	75~	計
ほとんど毎日		3 (14.3)	1 (10)	1 (33.3)	5 (14.7)
週 1 ~ 2 回		3 (14.3)	2 (20)		5 (14.7)
月 1 ~ 2 回		9 (42.9)	4 (40)	1 (33.3)	14 (41.2)
年 1 ~ 2 回		6 (28.6)	2 (20)		8 (23.5)
ほとんど会わない			1 (10)	1 (33.3)	2 (5.9)
計		21 (100)	10 (100)	3 (100)	34 (100)

年齢別 $X^2 = 7,910$ ns DF = 8

は、3.2人である。

子供の居住地;表4-2は、子供の現在の居

住地についての質問である。子供の内、同じ岩手町内に居住している子供がいる世帯が3割と高く、さらに県内の他市町村まで含めると約7割強と高い割合を占めている。 χ^2 検定で有意差はみられない。

子供と会う頻度;表4-3の子供と会う回数を見ると「ほとんど毎日」から「月に1~2回」までの割合が約7割と高い数値を示している。これは、岩手県内に居住している子供が表4-2でみたように、7割と高い割合を占めている点を考えると、ほぼ子供の県内居住割合と一致し、比較的子供との交流が高いことを示している。なお、今回の調査対象である岩手町沼宮内地区は、盛岡まで汽車、車で約1時間と通勤可能な距離ということもあって訪ずれやすいということもあるかもしれない。しかし、子供とほとんど交流のない人が2人おり、高齢化することによって断絶状態が現われてくる傾向があることに注意しなければならない。 χ^2 検定で有意差はみられなかった。

子供との別居;表5は、現在、「子供と一緒に生活していない理由」について質問した項目である。「子供の勤めの関係」と回答した人が72.3%と非常に高い割合を占めている。反面、「考え方の相違」など子供との関係を考慮して

表5 子供と一緒に生活しない理由(複数回答)

理由	才	60~64	65~74	75~	計
考え方、習慣が違う		1 (4.5)		3 (100)	4 (11.1)
子供、嫁との折り合いが悪い					
気軽に暮したい		3 (13.6)	1 (9.1)		4 (11.1)
住宅が狭い			1 (9.1)		1 (2.8)
子供のためによい		2 (9.1)	1 (9.1)		3 (8.3)
子供の勤めの関係		17 (77.2)	7 (63.6)	2 (66.7)	26 (72.2)
その他		2 (9.1)	2 (18.2)		4 (11.1)
計		22	11	3	36

年齢別 $X^2 = 20,624$ ns DF = 10

一緒に生活しないと回答した人が20%弱を占めている。また、「気軽に暮したい」と考える人が年齢が低いほど多くなる傾向もみられる。こ

の傾向は、従来の同居という家族形態から西欧的な近距離であっても別居といった家族形態への変化が農村においてもわずかではあるが受け入れられてきたと判断してもよいのであろうか。 χ^2 検定でも有意差が認められた。

将来;表6は、将来夫が死亡し1人になった場合の「身のふり方」についてたずねた項目で

表6 将来1人になった時

方法	才	60~64	65~74	75~	計
1人で生活	6 (27.3)	5 (45.4)		11 (30.6)	
子供、孫と一緒に	10 (45.5)	4 (36.4)	2 (66.7)	16 (44.4)	
兄弟、親類と一緒に					
老人ホーム	1 (4.5)			1 (2.8)	
わからない	5 (22.7)	2 (18.2)	1 (33.3)	8 (22.2)	
計	22 (100)	11 (100)	3 (100)	36 (100)	

年齢別 $X^2 = 3,180$ ns DF = 6

ある。「子供、孫と一に暮す」と回答した人が全体で44%と過半数を割っている。「1人で暮す」又は「老人ホーム」と回答した人が33%を占め、3人に1人が子供との同居に期待していない。「わからない」と回答した人が、8人22%を占めていることは、現在の不安定な精神状態をあらわしているものと考えられる。 χ^2 検定で有意差はみられない。

表7は、表5「将来1人になった時」と表6「現在、一緒に生活しない理由」をクロス集計したものである。「一緒に生活しない理由」として「子供の勤めの関係」と回答したにもかかわらず、「子供と暮す」と回答した人と、「1人で暮す」又は「老人ホームで暮す」と回答した人が、同数の10人を占めている。このことは、「子供の勤めの関係」と回答したが、むしろ他の理由のために体面上このような回答したとも考えられる。一方、「持ち家」世帯が36世帯中、35世帯を占めていることから、住みなれた家とその土地を離れたくない等の理由も推測できる。

「考え方の相違」や「気軽に」「子供のため」と回答したが、将来は「子供と暮す」と回答した人が約70%を占めている。この背景には生活に支障のない限りは1人で暮すが、体が不自由

になった時に子供の世話になると考える傾向が強い。

また「勤めの関係」と回答した人で、将来について「わからない」と回答した人が23%を占め不安定な状態にあることを示している。 χ^2 検定で有意差はみられなかった。

表7

理由	方法	1人	子供孫	老人ホーム	わからない	計
考え方、習慣が違う			3 (75.0)		1 (25.0)	4 (100)
子供、嫁との折り合い						
気軽に暮したい			3 (75.0)		1 (25.0)	4 (100)
住宅が狭い						
子供のためによい			1 (33.3)		2 (66.7)	3 (100)
子供の勤めの関係			10 (38.5)	1 (3.8)	6 (23.1)	26 (100)
その他		1 (25.5)	3 (75.5)			4 (100)
計		10	20	1	11	42

$X^2 = 12,807$ ns DF = 15

家事分担;表8-1では、「夫婦間での家事

表8-1 家事の役割分担 (複数回答)

役割	才	60~64	65~74	75~	計
床の上げ下ろし	20 (91.1)	9 (81.8)	1 (33.3)	30 (83.3)	
室内の掃除	20 (91.1)	7 (63.6)	1 (33.3)	28 (77.8)	
食事の準備、あとかたづけ	20 (91.0)	9 (81.8)	1 (33.3)	30 (83.3)	
洗濯	20 (91.0)	8 (72.7)	1 (33.3)	29 (80.6)	
風呂たき	17 (77.2)	9 (81.8)	1 (33.3)	27 (7.5)	
食糧の買出し	19 (86.4)	9 (81.8)		28 (77.8)	
計		116	51	5	

年齢別 $X^2 = 1,575$ ns DF = 10

表8-2

分担	才	60~64	65~74	75~	計
全部共同			3 (27.3)	2 (66.7)	5 (13.9)
一部共同	5 (22.7)		1 (9.1)	1 (33.3)	7 (19.4)
全部妻	17 (77.3)		7 (63.6)		24 (66.7)
計	22 (100)	11 (100)	3 (100)		36

年齢別 $X^2 = 13,900$ ns DF = 4

の役割分担」について質問した項目である。表8-2は「家事分担」の程度を3つの型に分け、その割合を表わした。

「床の上げ下ろし」から「食糧の買出し」まで、全て妻が行っているケースが60～64歳で約80%弱と高い割合を占めているが、高齢になるにつれて一部または全部を共同で行うようになり役割分担が進んでいる。

これは、お互いに体が弱くなるにしたがって家庭内での協力が進んでいくことを示している。しかし、協力化が進んでいるとはいえ、まだ65～74歳で3割強にすぎず今後一層促進されなければならない。将来、妻の方が夫より先にたおれたり、死亡するケースを考えると夫に対して家事の役割がすべて負担されることになる。今後、家事は妻の役割という意識をあらためさせ、家事への積極的取組みを啓蒙する必要性が大きい。χ²検定で、表8-1では有意差はみられなかったが、表8-2では有意差が認められた。

相談相手；表9は、「夫以外の相談相手」について質問した項目である。年齢に関係なく「子供」と回答した人が過半数をこえている。しかし、約40%近い人は子供を相談相手として考えていないという結果がでた。反面、同町内に兄弟や親類が多いことから「兄弟」や「親類」を相談相手としている人が約3割と多い。親にとって、子供よりは年齢も近く、居住地も近い親類の方が頼りになる身近かな存在であるということであろうか。

「夫以外に相談相手がいない」と回答している人が22%を占めている。このことは、独居世

帯となった場合に孤立するおそれ強いことを意味する。その場合、手助けとなるのが行政機関であるが、しかし相談相手として行政機関をあげている人はゼロであることを考えた場合、行政機関は、より身近な存在となる努力を要求される。χ²検定で有意差はみられなかった。

3. 地域関係

近所交流；表10は、「近所との交流」について質問した項目である。全体で約67%の人が世間話等近所の人となんらかの交流を行っているが、年齢が高くなるにつれてその密度、範囲が浅く狭くなってきている。しかも、「困った時、

表-10 近所との交流（複数回答）

項目	60～64	65～74	75～	計
世間話	16 (72.7)	7 (63.6)	1 (33.3)	24 (66.7)
一緒に酒を飲む				
一緒に遊ぶ	2 (9.1)	2 (18.2)		4 (11.1)
困った時、相談する	1 (4.5)			1 (2.8)
一緒に旅行する	2 (9.1)	3 (27.3)		5 (13.9)
冠婚葬祭に招く	8 (36.9)	3 (27.3)		11 (30.6)
農作業の手伝い	1 (4.5)			1 (2.8)
契約等の保証人	1 (4.5)			1 (2.8)
お金の貸借	1 (4.5)			1 (2.8)
なし	4 (18.2)	2 (18.2)	2 (66.7)	8
計	36	17	3	56

年齢別 X² = 12, 179 ns DF = 16

表-9 夫以外の相談相手は（複数回答）

	60～64	65～74	75～	計
子ども	11 (50.0)	6 (54.5)	2 (66.7)	19 (52.8)
嫁	4 (18.2)	1 (9.4)	1 (33.3)	6 (16.7)
孫				
兄弟	8 (36.4)	1 (9.1)		9 (25.0)
親類		2 (18.2)		2 (5.6)
友人	1			1
近所の人	1 (4.5)			1 (2.8)
市町村役場				
特になし	5 (22.7)	2 (18.8)	1 (33.3)	8 (22.2)
計	30	20	4	48

年齢別 X² = 10, 302 ns DF = 12

表-11 あなたが参加している団体や集まりは（複数回答）

団体	60～64	65～74	75～	計
老人クラブ	16 (72.7)	7 (63.6)	1 (33.3)	24 (66.7)
老人クラブ以外の趣味、娯楽の会				
老人クラブ以外の社会奉仕団体	2 (9.1)	2 (18.2)		4 (11.1)
スポーツ団体	1 (4.5)			1 (2.8)
文化団体	2 (9.1)	3 (27.3)		5 (13.9)
宗教団体	8 (36.4)	3 (27.3)		11 (2.8)
町内会、自治会	1 (4.5)	3		1 (2.8)
その他	1 (4.5)	3		1 (2.8)
なし	5 (22.7)	2 (18.2)	2 (66.7)	9 (25.5)
計	36			

年齢別 X² = 10, 613 ns DF = 14

相談する」と回答した人は、全体で61人だけ、さらに近所との交流「なし」と回答している人が全体で8人(22%)を占めていることは、農村においても近所との閉鎖性が高まってきていることを示していると思われる。 χ^2 検定で有意差はみられない。

参加している団体;表11は、「参加している団体、集まり」についてたずねたことである。

「老人クラブ」に参加している人が70%弱と多くの人が参加しており、地域においていかに老人クラブが大きな存在であるかを示している。それゆえ、老人クラブのあり方が今後一層問われよう。「宗教団体」に参加している人が、老人クラブについて30%と多いということは、生活に対する不安の裏返しの結果とも考えられる。

「老人クラブ」「文化団体」など団体や集りに、まったく参加していない人が全体で9名、約25%と $\frac{1}{4}$ を占めていることは、やはり閉鎖性がかがえる。 χ^2 検査で有意差はみられなかった。

日頃の楽しみ;表12は、「日頃、楽しみにしていること」についての質問である。「子供、孫と会う」ことと回答した人が50%と最も多いが、しかし低い数値とも思える。次に「TV、ラジオ」が41%を占め、人的交流よりもマスメディアが好まれている。「夫との会話」をあげている妻は10%強にすぎず、夫婦間にお

表12 日頃楽しみにしていることは(複数回答)

楽しみ	才	60~64	65~74	75~	計
夫との会和	4	1		5	(18.3)
友人や近所の人とのつきあい	3	2		5	(13.6)
ラレビ、ラジオ	9	3	3	15	(40.9)
旅行	3	1		4	(13.6)
子どもや孫に会うこと	1	6	1	8	(50.0)
老人クラブなどの活動	1		3	4	(4.5)
趣味	6	2		8	(27.3)
読書	1			1	(4.5)
スポーツ	1			1	(4.5)
働くこと	5	2		7	(22.7)
その他	1	3		4	(4.5)
他	45	20	6	71	

年齢別 $X^2 = 25,370$ ns D F = 20

る会話の貧弱さをあらわしている。同様に「友人や近所とのつきつきあい」をあげている人も10%強にすぎないことから、地域における交流が希薄化しとていることが推測できる。 χ^2 検定では有意差はみられなかった。

4. 経済的状況

労働;現在の「妻の労働」について質問した項目である。この場合の「労働」とは、いくらかの収入をとまなう仕事を行っていることを意味する。

現在、働いている人は全体で過半数の人が働いている。とくに60歳代では、過半数をこえる

表13-1 妻の労働

労働	才	60~64	65~74	75~	計
働いている	12	6	0	18	(54.5)
働いてない	10	(45.5)	(100)	(5.0)	
計	22	11	3	36	

年齢別 $X^2 = 2,899$ ns D F = 2

表13-2 働く理由

理由	才	60~64	65~74	75~	計
生計維持のため	5	2		7	(41.7)
小遣い	2	(33.3)		2	(16.7)
生活のほり	3	1		4	(25.0)
健康によい		2		2	(33.3)
社会に役立ちたい					
その他	1	1		2	(8.3)
N	1	(8.3)		1	(8.3)
計	12	6		18	(100)

年齢別 $X^2 = 11,818$ ns D F = 10

表13-3 今後の労働意欲

意欲	才	60~64	65~74	75~	計
働きたい	2	1		3	(20)
働きたくない	5	4	1	10	(50)
働けない	3		2	5	(30)
計	10	5	3	18	(100)

年齢別 $X^2 = 4,500$ ns D F = 4

人が働いている。職種としては、店での販売、理容業など主として定年に関係のない自営業が多い。一方、畑などで自分の食べる分としての農作業を行っている人もみうけられる。 χ^2 検定で有意差はみられない。

働く理由；現在、働いている人にその理由をたずねたのが表13—2である。「生計維持のため」と回答した人が、4割ほど占めている。60代前半では、生活費のための労働が必要であることを示している。 χ^2 検定で有意差はみられない。

今後の労働意欲；現在、働いていない人で「今後の労働意欲」についてたずねた項目である。「働きたくない」とする人が全体で56%と過半数をこえている。「働けない」人も加えると約8割強と高い数値となった。地域に就職の機会が少ないことも一因とも思える。 χ^2 検定で有意差はみられない。

夫の労働；表14は、「夫の労働の有無」について質問した項目である。現在、「働いていない夫」は全体で6割弱を占めている。妻の50%と比較すると夫の方が働いてない人が多い。夫の場合、65歳以上になると急速に働いていない人が増えるが χ^2 検定で有意差はみられなかった。

表15は、表13—1と表15の「妻」と「夫」の

表14 夫の労働

労働	才				計
	60~64	65~74	75~		
働いてい	12 (54.5)	3 (27.2)			15 (41.7)
働いてない	10 (45.5)	8 (72.8)	3 (100)		21 (58.3)
計	22 (100)	11 (100)	3 (100)		36 (100)

年齢別 $X^2=4,582$ ns D F = 2

表15 妻、夫の労働の有無

夫	年 有無	妻								統計
		60~64		65~74		75~		計		
		有	無	有	無	有	無	有	無	
働いている	7 (31.8)	5 (22.7)	2 (18.2)	2 (18.2)			9 (25.0)	7 (19.4)	16 (44.4)	
働いてない	5 (22.7)	5 (22.7)	2 (18.2)	5 (45.5)		3 (100)	7 (19.4)	13 (36.1)	20 (55.6)	
計	12	10	4	7		3	16	20	36	

年齢別 $X^2=4,227$ ns D F = 4

有無別 $X^2=0,874$ ns D F = 1

「労働の有無」をクロス集計したものである。

「夫婦とも働いている」ケースは25%と、 $\frac{1}{4}$ を占めている。一方「夫婦とも働いていない」ケースは36%である。夫婦のどちらか、または二人とも働いているが全体で60%弱占めていることは、比較的社会進出の機会が多いともいえる。しかし、夫婦とも働いてないケースが高齢になるにつれて、23%から45%。そして100%と増加することはやむを得ない。 χ^2 検定で有意差はみられない。

収入源；表16は、現在の「主な収入源」を1つあげてもらったものである。「年金、恩給」が44%と最も多く、「子供からの仕送り」は1世帯にすぎない。生活保護世帯は3世帯、しかし生活保護世帯に該当する世帯であっても夫がその受給を拒否しているケースが1世帯あった。

「子供からの仕送り」の低さは、自分達の生活に追われ余裕がない結果とも考えられる。 χ^2

表16 主な収入源

収入源	60~64	65~74	75~	計
勤 労 収 入	6 (27.3)	1 (9.1)		7 (19.4)
子供からの仕送り			1 (33.3)	1 (2.8)
年 金、 恩 給	9 (40.9)	7 (63.6)		16 (44.4)
生 活 保 護 費		2 (18.2)	1 (33.3)	3 (8.3)
家 賃、 地 代	2 (9.1)			2 (5.6)
利 子、 配 当				
そ の 他	5 (22.7)	1 (9.1)	1 (33.3)	7 (19.4)
計	22	11	3	36

年齢別 $X^2=22,852$ ns D F = 10

表17 平均月収入

金額	60~64	65~74	75~	計
10万円未満	3 (13.6)	4 (36.4)	2 (66.7)	9 (25.0)
10万~20万円未満	10 (45.5)	3 (27.3)	1 (33.3)	14 (38.9)
20万~30万円 "	8 (36.4)	2 (18.2)		10 (27.8)
30~40万円 "	1 (4.5)	1 (9.1)		2 (5.6)
40万円以上				
N A		1 (9.1)		1 (2.8)
計	22 (100)	11 (100)	3 (100)	36 (100)

年齢別 $X^2=6,573$ ns D F = 6

検定で有意差が認められた。

平均月収;表17は、現在の「平均月収」について質問した項目である。10万未満が9世帯25%と $\frac{1}{4}$ を占めている。20万円まで含めると全体の約64%に達する。

しかし、この金額が決して高いとは思えないが、最低生活に必要な金額がいくら位なのかは推則できない。なお、この収入についての金額を10万円単位で行ったが、幅が大きく、5万円単位の幅が適切ではなかったかと反省している。 χ^2 検定で有意差はみられなかった。

現在の不安;表18は、現在の「不安」について質問した項目である。「健康」に対する不安が75%と全体の $\frac{3}{4}$ が不安感をいんでいる。これは年齢に関係なくトップにあげられている。しかし、一方で「生活費」、「医療費」といった経済的不安を感じている人は、4人約1割にすぎない。また「住居」に対して不安を感じている人はゼロである。

これは、先に述べたが「持ち家」世帯が、36世帯中35世帯を占めている結果といえる。経済的不安の割合が低いのは、「持ち家」であること、また自分の食べる食糧は自給等である程度確保できるといった要因が大きく作用し、決して十分な経済力とはいえないまでも当面の生活には支障ないと考えていると思われる。 χ^2 検定で有意差はみられない。

表18 現在の不安(複数回答)

項目	才	60~64	65~74	75~	計
夫婦の将来	5	5	1	11	(22.7) (45.4) (33.4) (30.6)
子供、孫のこと	2	2		2	(9.1) (18.2)
健康	18	7	2	27	(81.8) (63.6) (66.7) (75.0)
仕事	2			2	(9.1)
住居					
生活費	1			1	(4.5) (28)
医療費	3			3	(13.6) (8.3)
特になし	2	1	1	4	(9.1) (9.1) (33.3) (11.1)
計	31	15	4	50	

年齢別 $X^2 = 11.549$ ns DF = 12

むすびにかえて

今回の調査を行って、夫婦世帯は独居世帯と比較した場合、家の中が整理されてきれいであること、また会話をしているにもかかわらず非常に明るいケースが多いことなど、ホームヘルパーともども強く感じた。しかし、農村地帯といえども、以前よりも近隣との交流が少なくなりつつあり、さらに夫婦間の会話も乏しくなる傾向が強い。

一人暮らし世帯にいたる前段階として、家庭内での役割分担による助けあいを深め、そして夫婦、近所との会話、交流を活発にすることによって互いの助けあいを促進するにはかかれなければならない。行政側からの在宅ケア推進に際しても健康面の不安に対する医療態勢の充実、並びに行政機内への信頼を高めるための施策など量的拡大とともに一層の質的深さが要求される。

なお、この地区でも消火器、健康ふとんなどの訪問販売にあい、ほとんどの世帯で1~2回は購入経験があると聞いた。そのため、今回の調査もホームヘルパーの同行なしではかなり困難があったのではないかと予想された。今後、このような方面への対策も早急に考えなければならない。

本稿は、昭和60年10月26日「第19回東北社会福祉合同セミナー」(於、東北福祉大学)において口頭発表したものの加筆補完である。最後に本調査にご協力いただいた岩手町社会福祉協議会にお礼を申し上げます。